

重点取組分野	平成28年度		総括	重点取組分野	平成29年度		総括	重点取組分野	平成30年度		総括
	具体的取組	自己評価結果			具体的取組	自己評価結果			具体的取組	自己評価結果	
確かな学力	①研究会へ参加したり校内研修で指導法を学び合ったりしながら授業研究の推進を図る。 ②漢字・計算などスキルタイムの充実を図る。 ③学習習慣の定着を図るために家庭との連携を行う。	①重点研究で体育科の研究に取り組み、一人一回ずつ授業実践して互いに見合い、テーマにせまる児童への支援を学ぶことができた。 ②漢字・計算などのスキルタイムを実践し、時間をしっかり確保して学力向上の支えとした。 ③家庭との連絡を日々密にして、個々の課題を家庭と共通理解するよう努めた。	A	確かな学力	①研究会へ参加したり校内研修で指導法を学び合ったりしながら授業研究の推進を図る。 ②漢字・計算などスキルタイムの充実を図る。 ③学習習慣の定着を図るために家庭との連携を行う。	①重点研究で、指導案検討、事後研究会を通して、指導法について学んだ。また、研究を通して児童の実態を共有し、手立てを考え、テーマに迫ることができた。 ②スキルタイムを実践することで、漢字・計算の基礎力を培うことができた。 ③懇談会・面談等を通して、課題を家庭に伝え家庭学習の大切さを伝えた。	B	確かな学力	①市学力学習状況調査の結果をもとに、児童の実態を把握し、学年としての重点を明らかにして指導にあたる。 ②重点研の算数科を中心に、自己肯定感をもてる子どもを育成するための指導の工夫について研究をする。 ③スマイル教室や算数少人数指導の活用、及び学習習慣の定着を目指して家庭との連携を行う。	①子どもたちの実態を知るのにより資料となった。重点研究の指導計画を考える際に参考とした。日常的な指導にも役立てた。 ②どんな手立てが児童の自己肯定感につながるのか共通理解をもって指導にあたることができた。 ③スマイル教室や少人数指導では、子どもたちが安心して学習する環境を提供することができた。家庭学習については、学校としての方向性をもって取り組めるようにしたい。	B
豊かな心	①道徳の授業公開を全学級で行う。 ②たてわり活動の充実を図る。 ③保護者・地域・商店街・盲特別支援学校などふれあう活動の充実を図る。	①授業参観時に道徳の授業公開を行った。 ②たてわり活動の充実により、高学年児童が自分だけでなく周りに配慮したり、人を気遣う気持ちが育った。 ③各学年で商店街でのお店体験や盲学校との交流などの取組をして、児童の地域を大切にすることを育てた。	B	豊かな心	①道徳の授業公開を全学級で行う。 ②たてわり活動の充実を図る。 ③保護者・地域・商店街・盲特別支援学校などふれあう活動の充実を図る。	①道徳の授業で、どのような指導が行われているか保護者に理解してもらうことができた。 ②集会、遠足、運動会やたてわり遊び・給食など年間を通して交流を行うことで、周りのことを考えて行動しようとすることができた。 ③様々な立場の人々のために自分ができていることを見つけ行動しようとする姿が見られるようになった。	B	豊かな心	①道徳の授業公開を全学級で行う。月に1度Y-Pの実施。 ②たてわり活動の充実を図る。 ③集会、遠足、運動会やたてわり遊び・給食など年間を通して交流を行うことで、異学年と交流し、周りのことを考えて行動しようとすることができた。 ④様々な立場の人々のために、相手の状況を考えて、自分ができることを見つけ、行動しようとする姿が見られるようになった。	①道徳の授業で、どのような指導が行われているか保護者に理解してもらうことができた。人権だよりでは、各クラスで行ったY-Pを発信した。 ②集会、遠足、運動会やたてわり遊び・給食など年間を通して交流を行うことで、異学年と交流し、周りのことを考えて行動しようとする姿が見られるようになった。 ③様々な立場の人々のために、相手の状況を考えて、自分ができることを見つけ、行動しようとする姿が見られるようになった。	B
健やかな体	①体力テストの結果を家庭と共有し、連携して体力の向上、生活習慣の改善を図る。 ②R-PDCAサイクルに基づき、学校保健委員会を運営する。 ③専門家の強みを活かして学校保健活動の展開を図る。	①家庭との連絡を密にして、健康維持のための生活習慣改善を共通理解するよう努めた。 ②学校保健委員会を年3回計画し、保健委員を中心に実施した。 ③学校医・学校歯科医・学校薬剤師からの情報をいかしたり、健康相談を行ったりした。	A	健やかな体	①体力テストの結果を家庭と共有し、連携して体力の向上、生活習慣の改善を図る。 ②R-PDCAサイクルに基づき、学校保健委員会を運営する。 ③学校保健委員会の強みを活かして学校保健活動の展開を図る。	①個人面談の際に、体力テストの結果を分析し、見えてきた課題について説明した。学校と家庭で体力を向上する方法について考えた。 ②前年度の課題をふまえて、学校保健委員会を年3回行った。学校保健だよりで家庭にも結果を伝えた。 ③学校保健委員会では学校3師の助言をもらいながら活動した。体育協会と連携し、体力向上の取り組みを行った。	A	健やかな体	①体力テストの結果をもとに、週1回の体力向上の時間を運営し、体力向上や運動の習慣づけを行う。 ②体育協会の方々との連携し、月1回のリズムダンストレーニングを行い、体力向上を図る。 ③R-PDCAサイクルに基づき、課題と成果を明確にしなが、児童、教職員、家庭、地域、学校三師が一体となり、学校保健委員会を運営する。	①週1回の体力向上の時間や体育協会とリズムダンストレーニングを行うことで運動の習慣づけを行った。休み時間に縄跳びなどの運動を行う児童の姿も見られたが、運動が苦手な児童の意識を変えるまでには至らなかった。 ③学校保健委員会を年3回行った。学校保健だよりで家庭にも結果を伝えた。	B
児童指導	①携帯電話など子どもを取り巻く課題について情報を収集し、指導を行っていく。 ②講師の定期的な訪問による指導・助言を受けながらY-Pアセスメントを実施する。	①学校生活だけでなく、ばれっとと月に一度情報交換の場を設定し、放課後の様子も把握するよう努めた。また、児童支援専任を中心に、担任・学年・管理職で情報を共有し、チームで指導にあたった。 ②Y-Pアセスメントを実施し、学年・ブロックでの児童実態の把握をして児童指導にいかした。	A	児童指導	①携帯電話など子どもを取り巻く課題について情報を収集し、指導を行っていく。 ②講師の定期的な訪問による指導・助言を受けながらY-Pアセスメントを実施する。	①神奈川警察署と連携し、1・2年「防犯教室」4年「非行防止教室」5・6年「サイバー教室」を行った。また、携帯電話によるトラブルには、保護者と連携して取り組み、児童の指導や未然防止のための全体指導を行い、組織対応ができた。 ②年2回Y-Pアセスメントを実施し、学年での児童実態の把握をして、プログラムを実施し、児童指導にいかした。	A	児童指導	①携帯電話・スマホの利用について、学校、関係機関、家庭と連携した授業を行う。 ②Y-P(子どもの社会的スキル横浜プログラム)を月に一回道徳の授業で行い、年間を通じて実践を行う。	①神奈川警察署と連携し、1年「防犯教室」2年「非行防止教室」学校保健委員会がメディア安全教室を行った。また、携帯電話によるトラブルには、具体的な事例を盛り込んだ保護者向け資料を作成し、配付した。 ②年2回Y-Pアセスメントを実施し、学年での児童実態の把握をして、プログラムを実施し、児童指導にいかした。課題を抱える児童に対して、SSITを計画的に実施していきたい。	B
地域連携	①盲特別支援学校、地域、商店街と積極的に関わり、良好な関係づくりに努める。 ②学校だより、HP等を通じて、保護者、地域への情報発信に努める。	①各学年で、商店街でのお店体験・盲特別支援学校との交流などをして、地域の行事に積極的に参加して関係を深めることができた。 ②学校だより・HPを通じて情報発信に努めた。また、地域の方に講話をお願いしたり、ボランティアに来ていただいたり学校行事や学習に関わっていただくよう文書・手紙等	A	地域連携	①盲特別支援学校、地域、商店街と積極的に関わり、良好な関係づくりに努める。 ②学校だより、HP等を通じて、保護者、地域への情報発信に努める。	①3年生のお店体験を行い、6年生が商店街と積極的に関わることができた。4年生は、盲学校との交流を継続的に行い、人権教育の視点からも学習を深めることができた。 ②学校だより・HPをはじめ、学校配信メールを通じて、情報発信に努めた。	A	地域連携	①盲特別支援学校、地域の商店街等と積極的に関わったり、地域の祭りや自治会主催の運動会などに児童が参加するよう促したりする。 ②合唱部の演奏やクラブの演奏などを、地域で披露し、本校児童の活躍を広く地域連携に生かせるようにする。 ③学校だより、HP等を通じて、保護者、地域への情報発信に努める。	①4学年は今年も継続して盲特別支援学校と交流を行った。教科の学習だけでなく、年の近い児童との交流を通して、人権意識が深まった。 ②合唱部は商店街や地域の集まりなどで演奏を披露し、地域連携に生かした。 ③今年度はHPの更新頻度が上がり、学校の取り組みを地域へ発信することができた。	B
特別支援教育	①定期的に情報共有を行い、共通理解を図る。 ②関係機関との連携を図ったり、校内研修を行ったりして指導実践に取り組む。	①家庭との連絡を密にして、児童一人ひとりに寄り添うことができるよう声掛けをしたり面談をした。 ②学校カウンセラー・SSW・神奈川区子ども家庭支援課・特別支援教育総合センターなどと必要に応じて積極的に連携した。	A	特別支援教育	①定期的に情報共有を行い、共通理解を図る。 ②関係機関との連携を図ったり、校内研修を行ったりして指導実践に取り組む。	①気になる児童については、担任に指導計画を作成してもらい、職員会議の際に共通理解を図った。 ②学校カウンセラー・SSW・神奈川区子ども家庭支援課・特別支援教育総合センターなどと必要に応じて積極的に連携した。また、通級指導教室に研修を依頼し、理解を深めた。	A	特別支援教育	①特別な支援を必要とする児童については、担任が個別の指導計画を作成し、職員会議の際に教職員の共通理解を図る。 ②適切な支援・指導を行うため、必要に応じて、関係機関との連携を図る。 ③校内研修を行い、教職員の特別支援教育への理解を深める。 ④学習に遅れがある児童に対し、特別支援学級を設置し、きめ細やかな指導を行う。	①気になる児童については、担任に指導計画を作成してもらい、支援の仕方について職員会議の際に共通理解を図った。 ②学校カウンセラー・SSW・神奈川区子ども家庭支援課・特別支援教育総合センター・東部療育センターなどと必要に応じて積極的に連携した。また、通級指導教室の教員に研修を依頼し、理解を深めた。 ③重点研では、講師をお迎えして、指導案検討と授業研修を行った。個別級の授業を通して、一般級の授業で生かせる視点を的確にアドバイスいただき、児童理解と授業力向上につながった。 ④特別支援教室では、年間を通して、児童の理解に合わせて学習指導を行った。担任と担当教員が連絡を取り合いながら、実施できた。	B
				いじめへの対応	①「いじめは絶対に許されない」という強い意識を全教職員に徹底し、日常の教育活動に反映させる。 ②いじめの定義を確認し、正しく理解した上で、いじめを見落とさず、いじめられた児童の立場に立ち、いじめを広くとらえ、情報の共有と組織的対応をとる。 ③人権的立場に常に立ち、配慮が必要な児童へ	①全教育活動、学校生活の中で見られるすべての状況を全教職員で共有し、対応を行った。 ②月1回の情報交換を定例とし、定義や事象の確認を行い、早期発見と早期対応を組織的に行った。 ③家庭と連携し、児童一人ひとりの感情や生活状況など総合的に把握し、必要に応じて周囲の児童の指導、家庭への連絡を行った。	A	いじめへの対応	①児童についての情報を全職員で共有し、いじめの早期発見と早期対応、家庭や関係機関との連携を確実に行う。 ②いじめの起きにくい風土の醸成のために、児童と教職員があいさつや気持ちのよい言葉づかいにに取り組んでいく。 ③人権的立場に常に立ち、配慮が必要な児童へのいじめ、偏見、差別をなくすための授業を行う。	①全教育活動、学校生活の中で見られるすべての状況を全教職員で共有し、対応を行った。 ②月1回の情報交換を定例とし、定義や事象の確認を行い、早期発見と早期対応を組織的に行った。いじめアンケートからわかることを分析し、教職員で対応策を考えたい。 ③人権週間、児童運営委員会を中心に「いじめ」について考える集会を行った。また、あいさつ運動やY-Pの検討会を行い、学級風土を居心地のよい雰囲気になるよう組織的に実践した。	B
人材育成・組織運営	①学年主任会議を定期的に開催する。 ②メンターチームを組織して、指導力向上を図る。 ③学年研の充実を図る。 ④校内研修を計画的に実施する。	①月に1度学年主任会議を実施し、管理職と学年等が見通しをもって学校運営できるようにした。 ②メンターチームで授業実践をして学ぶことができた。 ③校内研修を計画的に実施した。	A	人材育成・組織運営	①学年主任会議を定期的に開催する。 ②メンターチームを組織して、指導力向上を図る。 ③学年研の充実を図る。 ④校内研修を計画的に実施する。	①月1回共通理解の場をもつことで、見通しをもって、学校運営にあたることができた。 ②メンターチームで授業研究をしたり、日頃の悩みなどを話し合ったりすることで互いに学び合うことができた。 ③特別支援やY-Pなどその時のニーズに合った研修を行うことで、日常の指導に生かすことができた。	B	人材育成・組織運営	①メンターチームの研修を定着させ、中堅職員をリーダーとしながら年6回の自主研修を行い、経験の浅い職員とミドルリーダーの育成を図る。 ②学年主任会議を月1回定期的に開催し、共通理解を図ることで学校運営を組織的に行う。	①メンターチーム研修は、中堅職員がリーダーシップを発揮し、計画的に進めることができた。時間の確保を工夫していった。 ②学年主任会議は定期的に開催したが、十分な準備ができず、共通理解が図れない部分もあった。リーダーの意識を高め、組織的な学校運営を行ってきたい。	B
ブロック内相互評価後の気付き	○神奈川中学校でのふれあいコンサート・レク交流会では、ブロック各校の合唱や合奏・ダンス・吹奏楽などを発表し、生徒・児童の様子が分かるとともに、レク交流会で交流をもつことができた。 ○各学校の授業を参観することで、生徒・児童の実態をつかみ、授業や児童指導にいかすことができた。			ブロック内相互評価後の気付き	○地域の特性を生かして、商店街や盲学校、地域のお年寄りの方々など様々な人との関わりを通して、子どもたちが人権的な視点をもって学習することができた。 ○小中だけでなく、小中の授業参観・協議、学力・学習状況調査の共同分析を通して、ブロックとして児童・生徒の実態をつかんで、授業改善に生かすことができた。 ○学力向上にあたっては、家庭との連携が必須である。家庭学習の在り方について、学校全体で検討する必要がある。			ブロック内相互評価後の気付き	○多様な分野で外部との連携をもち、子どもたちにとって有効な支援をしようとする姿勢が伝わってくる。 ○自分とは違う立場の人の気持ちを考える取組は、とても大切である。個別級の児童に対する理解を深めることは、学校がだれもが安心して過ごせる場となる。来年度も継続できるとよい。 ○Y-Pを活用して児童の実態の把握をし、社会的スキルの育成に力を入れている。組織的な取り組みがよい。 ○地域の特性を生かして、豊かな教育活動を行っており、学校の強みとなっている。		
学校関係者評価	○全校をあげての取組に一体感があり、子どもたちの成長が伝わってくる。 ○学年間で差が出ないように配慮して指導していると感じる。 ○PTA活動への理解が今後必要であり、声かけ、呼びかけが大事なのではないかと考える。 ○学校評価としてアンケートをとっているが、どう分析してどうそれを反映していくのかもっと明確に伝えたい方がよいのではないかと考える。			学校関係者評価	○子どもたちが自分たちで考えて学習する指導ができていて、今までの教育活動をその視点で見直していくことが大事である。 ○学校は、子どもたちそれぞれのよいところを引き出して、自己肯定感を引き出す取組をしている。自信がなくて発表の音が小さい、あいさつが減ってきているなどの子どもの実態については、学校だけでなく、家庭や地域の教育力も必要である。PTAの広報誌などを利用して、アピールするなどの対策が考えられる。			学校関係者評価	○重点研は今年度より算数科で研究をしたのだが、先生方が授業を見合い、子どもたちの学力向上に向け努力されていることは、とても良いと思う。 ○児童指導では、学校、関係機関、家庭と連携し、担当の先生だけでなく学校全体が真剣に取り組んでくれているのが分かる。 ○学校現場は全体的に忙しい方向に向かっているため、地域全体で時間確保できる工夫をしてあげたいと考えている。		
学校経営中期取組目標振り返り	○全教員がチームとなって、「チーム大口台」として一人ひとりが積極的に学校経営の一端を担っているという意識をもって取り組むことができた。 ○地域に支えていただいたり、地域の協力を得てできる学習活動(3年お店体験・4年はまっこと未来カンパニー・6年感謝を表そう・合唱部の商店街等での演奏など)を実践することができ、地域の中で育つ子どもの育成をした。 ○「分かる授業」「楽しい授業」のため、日々教材研究・情報収集に努め、授業実践を見合うことで子どもたちの成長を見ることができた。			学校経営中期取組目標振り返り	○地域・保護者との連携を通して、様々な人々たちとの関わりを通して、子どもがまことに愛着をもち、充実した教育活動を行うことができた。 ○いじめに関する全校あげての取組を通して、子どもたち一人一人が安心して過ごせる環境をつくることができた。 ○子どもたちの学力の定着を図るためには、教師の授業力の一層の向上とともに、学校として家庭学習の見直しをし、家庭との連携が必要である。			学校経営中期取組目標振り返り	○地域・保護者との連携を通して、様々な人々たちとの関わりを通して、子どもがまことに愛着をもち、充実した教育活動を行うことができた。 ○問題行動、いじめに関わる全校あげての取組を通して、子どもたち一人ひとりが安心して過ごせる環境をより努力をした。 ○子どもたちの人間関係づくりや情報取組への適切な、迅速な対応に心がけたが、家庭との連携をさらに強化していく必要がある。 ○子どもたちの学力の定着を図るために、算数科の授業研究を教師の授業力の一層の向上とともに、長年の懸案である家庭学習の在り方に課題を持ち、家庭との連携が必要である。		